

1、中央（都）志向から地貌の発見

○「紅梅であつたかもしれぬ荒地の橋」（飯島晴子）―鉍毒で壊滅した足尾銅山鉍毒事件、旧谷中村周辺での作。昭和47年。『朱田』所収。

「紅梅」は歌語以来の京都文化を象徴する季語。「あつたかもしれぬ」との表現は紅梅への懐旧の思いを示しながら、紅梅に代表される京文化への懐疑、否定。「荒地の橋」には地貌の厳しさを見つめながら、無限のやさしさがある。（参考・『日本の橋』）

○「紅梅は光琳以後を愉しまず」（宮坂静生）―京都上賀茂、糺の森。

尾形光琳「紅白梅図屏風」（国宝・熱海MOA美術館蔵）のモデルになった紅梅。

2、沖繩への視点

○「天皇の國にはあらず飯匙倩の国」（神谷石峰）

15世紀は日本中国両国に属し、17世紀初め（1609）島津氏が侵攻。1872年（明治5）琉球藩。1879年（明治12）沖繩県。

独自の曆―北京曆ではない。（大唐帝国の植民地ではない）。
ニライカナイの神への感謝。

○「稲ささぐ節の祭の五穀持ち」（玉城一香）「シツイ」

○「生きぬいて生かされて母風車祝」（大城富子）「風車祝」（カジマーヤー）

○「黒糖を煮る魂石をふところに」（眞榮城いさを）

○「木精きしむなに会はむとすれば鷹あみの尿尿うり」

○「立雲のこの群青を歩みけり」（渡嘉敷皓駄）

3、戦後俳句―ヒューマニズムの時代

①「第二芸術―現代俳句について」（桑原武夫・昭和21・11「世界」）の影響

②根元俳句―「天狼」（昭23・1 誓子創刊）

「炎天の遠き帆やわがこころの帆

山口誓子

『遠星』

「夢の世に葱を作りて寂しさよ」

永田耕衣

『驢鳴集』

③社会性俳句―『銀河依然』（昭28・2、草田男）序文、「社会性俳句」論議発端
造型俳句―「本格俳句」（昭31・2「俳句研究」兜太）。

戦後俳句の総括としての「造型俳句」―対象と自己との間に「創る自分」を設定する。「創る」という点に戦後社会の凝縮された主体のあり方が伺われる。

「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」

金子兜太（『金子兜太句集』）

「天上も淋しからんに燕子花」

鈴木六林男（『国境』）

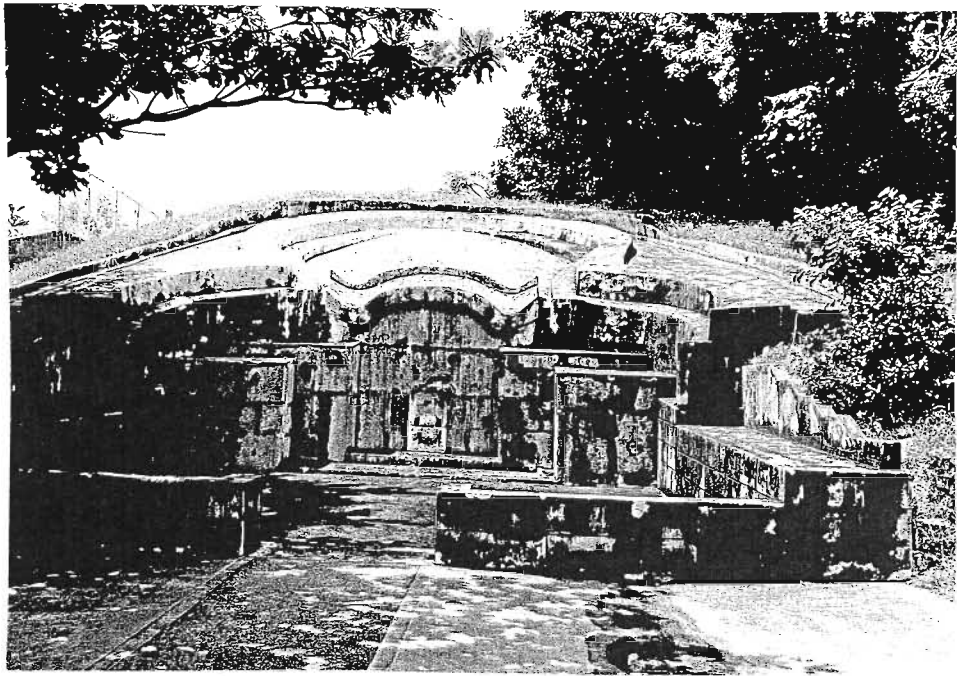
④前衛俳句―「俳句評論」（昭33・3、重信）

「帰り花鶴折るうちに折り殺す」

赤尾兜子

『歳華集』

4、ポスト戦後俳句―伝統回帰とアニミズム模索へ



沖縄「亀甲墓」

① 人間探求派批判―新芸術派、高柳重信・飯島晴子・阿部完市

「飛驒の／美し朝霧／朴葉焦がしの／みことかな」 高柳重信 『山海集』

「寒晴やははれ舞妓の背の高き」 飯島晴子 『寒晴』

「葉のかたちのトーストいちまい青森にて」 阿部完市 『にもつは絵馬』

② 伝統回帰―澄雄・龍太

「白をもて一つ年とる浮鷗」 森 澄雄 『浮鷗』

「一月の川一月の谷の中」 飯田龍太 『春の道』

③ アニミズム志向

○ 虚子的アニミズム 「山国の蝶を荒しと思はずや」 高浜虚子 『小諸百句』

○ 兜太的アニミズム 「梅咲いて庭中に青鯨が来ている」 金子兜太 『遊牧集』

④ 地貌探求

「落葉松はいつめざめても雪降りをり」 加藤楸邨 『山脈』

「山草に斑の入る頃や鷹戻る」 松林朝蒼

「切株があり愚直の斧があり」 佐藤鬼房 『名もなき日夜』

「帰る雁死体は陸へ戻りたく」 小原啄葉

「泥かぶるたびに角組み光る蘆」 高野ムツオ

「満月にひよいと乗りたる子もをらむ」 岩咲さら

「短夜やほろほろもゆる馬の骨」 正岡子規 『寒山落木』

「木々は身を振る外なき雨返し」 新谷ひろし